安岐城の戦について疑問の数々

水口忠孝

田原泰広が国東の田原庄に入部してから十三代目の親貫に至るまで三百年。最後の幕を閉じたのが天正八年の一月から十月に亘る長期の戦である。其の間に鞍骨城の戦を始め、安岐城の戦、及び其の周辺で行われた富山の戦、安岐砦、東方山、塩屋伊豫野、海浜の切寄の諸戦、或は実際寺の戦、或は又小早川の援兵軍船数十隻が安岐浦に到着したのを邀撃し姫島沖まで追撃した、等々海陸に亘る大がかりの戦が行われた。

大友宗麟は外に向つて勇力を張ると共に内に於いても、たえず内輪からの崩壊をおそれた。大友四家老の一と云われている田原氏に対し三百年間培われた重臣宿老をそのままそつくり大友氏の手中に収めようとしていたことは過去の事歴がよく証する所である。例えば宗麟の女を親貫に娶らせようとしたり、或は宗麟の末子親盛を武蔵（安岐の隣）の城主紹忍の養子にしたり、宗麟の次男親家を早くから安岐城主にあてがつていたこと、――天正八年二月、未だ田原親貫が存命しているのに、田原（親家）を名乗つて萱島、津崎、詫磨等の田原重代の重臣に感状を出したり、又三月一日宗麟から萱島に対して「田原親家国東郷に入郷するにつき一層忠節を尽すべし云々」、同六月に国東郷のおどむれから安岐城に入城しているがそれも田原親家を名乗つている。かかる状態で重臣宿老を次々に収めたが、収め得なかつた連中が前記の様に各所で戦つたのである。此の新構想の安岐城の戦については将来の課題として、此度は従来云われている安岐城の戦で疑問の点を述べる。

安岐城の戦は沢山な書物に書かれている。

豊城世譜

鞍掛城の戦起るや木付鎮秀及其子（実弟）鎮之は大友氏の命により安岐郷塩屋に出陣す、奈多大宮司鎮基は田原方の援助兵と称して、神軍を引率して木付氏と塩屋伊豫野に戦う鎮秀鎮之討死す。

杵築史

安岐城主田原親貫反するや木付鎮秀大友氏の命により兵を率いて之を討つ、奈多大宮司鎮基は田原氏に党し、神軍を以て木付軍に尾して塩屋原に到る、安岐城も亦城兵を出して木付軍を討つ。鎮秀腹背敵を受け奮戦遂に戦死せり。墓は安岐の田間にあり、弟も亦戦死す。因みに安岐城は義統のために攻め落され、親貫出奔し遂に自刃。田原氏十二世にして亡ぶ。

安岐郷土史（昭和六年）

親貫鞍掛城に拠つて大友に叛く、奈多大宮司奈多鎮基に命じて安岐城を守らしむ。一方大友氏は木付城主鎮秀をして安岐城を討たしむ、安岐城の守将奈多鎮基、木付鎮秀と伊豫野原で戦い、父子を獲たれども、城終に陥る、此に於て大友義鎮、八坂甚太郎をして之を守らしむ。

奈多旧記

天正十五年奈多宮の領地を悉く豊太閤及び大友宗麟より没収せらる。

奈多鎮基は安岐城主田原親貫に同意して、大友氏に随従せる木付鎮秀を塩屋にて殺したり、其後義統又親貫を攻めて鞍掛に亡ぼしたこと、豊陽志に見えたれば、当時鎮基も義統に抗して所領を没収せられしならん。

下山口庄屋安部家の系図

天正八年正月奈多鎮基滅亡の後浪人となり内迫に住居す。

（註）　天正八年ではない。安部宗政は奈多氏の家臣で天正十五年に奈多鎮基死亡したが嗣子がなくて奈多氏は断絶した。従つて奈多氏の家臣は悉く四散したがその一人と思はる。尚前記十五年の没収は豊太閤からで宗麟ではない。後世の記録で混線してゐる点が多い。（水口註）

鞍掛城の戦起るや木付鎮秀其子鎮之大友氏の命により安岐郷塩屋に出陣す。奈多大宮司鎮基田原方の援助兵と称して神軍を引率し木付氏と塩屋伊豫野で戦う。鎮秀、鎮之奈多氏の部下松原甚介、安部貞政等三百人奮戦す。

以上の諸記録を総合するのに、奈多鎮基は、田原親貫に味方している点、何れも共通である。

扨て大友氏と奈多氏との関係を見ると、

1. 宗麟の妻は奈多鑑基の女(ムスメ)である。
2. 奈多鎮基と大友義統は従弟(いとこ)である。
3. 奈多鎮基と妻とは従弟夫婦である。

こんな血縁関係であるだけでなく、奈多鑑基も鎮基も大友宗麟の配下の一武将であり、且つ宗麟の勢力下に於ける社奉行でもあつた。かかる深い間柄であるから、奈多氏が大友氏に反抗すると云うことは考えられない。尚事実叛いていない証拠として、天正八年三月五日の古文書がある。それは奈多鎮基が家臣の松原甚介に与えた知行書で、

今度田原親貫被奉対御国家逆意之企不及是非ゟ然者鎮基事以順儀之覚悟此堺無事被成千秋万歳ゟ各別而辛労故当切寄差堪満足此時ゟ雖為少分於竈門一所預之ゟ坪付別紙有之可有知行ゟ弥奉公干要ゟ恐々謹言

天正八年三月五日　　鎮　基　在判

松原甚介殿

国東半島史には此の知行書を大部分書替えて載せてある。河野清実先生は此の文書を以て直ちに奈多鎮基は親貫を謀叛人ときめた、つまり奈多鎮基は大友方に味方していると云うのである。

今日まで無条件に此の説を肯定していたのであるが、去る昭和三十六年地方史研究会の際渡辺澄夫先生が、宗麟のキリシタンに入教洗礼を受けた話を聞いて以来、平素の疑問が次々と解けて来る感じがする。此の文書の解釈も其の一つで、河野先生の此の知行書を書替えられた苦衷を察する。

田原親貫が国家（大友）に対して逆意を企てたことは是非に及ばない。こう書いている奈多鎮基の心情は親貫に対して寸毫も憎しみを持っていない、寧ろ同情をよせていると思わるるのである。あの父親宏に対して宗麟のとつた態度、事毎に圧迫を加えたのを思う時親貫の謀叛は当然である。此は是非に及ばないと云つたのである。

宗麟がザビエルの来府以来キリシタンに好意を寄せ終に洗礼を受けようとするや妻（鑑基の女）及び其の兄紹忍は強く反対し続けた。にもかかわらず押し切つて天正六年七月廿五日、妻を離縁して洗礼を受けた。従つて妻は生家でもあり且つ自分の女の行つている奈多に帰つていたことは云うまでもない。こうした宗麟の暴挙に対し、忿懣やるせない奈多鎮基の心は、田原親貫のそれと似通う点があつた。天正八年一月いよいよ反旗を翻した心情に同情したことも当然であろう。

そうは云うものの、私的な感情を捨てて公的な任務を忘れることはしなかつた。此の堺塩屋原は自分の領域で無事に守り得たことは此の上もない目出たいことである、と。

以上の文面よりして判断すれば、奈多鎮基は田原親貫に対して決して同意しているのでもなければ、共謀でもない、唯同情したと云う程度である。又大友氏に対しては少くとも、天正六年から二、三年間は気持よい交際はなし得なかつたであろう。けれども敵意まで持つていたとは思われない。その証拠には天正八年の六月に従弟に当る親家が安岐城に入城したのに何等問

題を起していない。天正十二年、筑後に攻め入つた際奈多氏も従軍している。要は親貫に対しても大友家に対しても双方に味方しなかつたのが真実であろう。問題は木付氏に対する件であるが、前述の如く大友氏に対しても従来の様に厚意を持つていない矢先であり、且つ木付氏が塩屋原に侵入領域を侵したかどを以て討伐したのである。

（註）　塩屋は松原家の領内であり且つ奈多氏の勢力範囲である。

以上の如く疑問であつた古文書の解釈や、大友氏の味方である木付氏を大友の外戚である奈多氏が伐つたのも氷解し得たのである。次に、田原親賢（紹忍）が奈多鑑基の次男で、武蔵田原に養子になつたことは、今日までどの記録にも出て来なかつた。只田原弁蔵氏の系図に親資の養子親賢とあるだけで、此を証する何にもなかつたが、

耶蘇会士　日本通信　豊後篇

天正五年六月五日　ルイス・フロイス　臼杵よりの書状に

△王妃（宗麟の妻）には親賢と称する一人の兄弟あり。

△親虎（親賢の養子）の叔母なる王妃此の決心を聞くや直ちに反対してキリシタンになることを阻止せり。彼の父は其の姉妹（王妃）と同一意見にて大いに妨害を加え囚人の如く彼を閉じ込め……。

△ドン・シマン（親虎）が其の父（親賢）に与えし返答を聞き王妃は密かに其の兄弟（親賢）と謀り此の良き基督の騎士（親虎）の許に使者を遣わして之を威嚇し……。

以上の如く親賢はキリシタンにならず終始養子親虎の入教に反対して終には親虎を廃嫡し宗麟の末子親盛を嗣子とした。と伝えている。此の外国の記録によつて驚くべき発見は、親賢が奈多鑑基の次男であつた証拠であるだけでなく。従来の歴史では親賢（紹忍）は、第一にキリシタンに入教し、宗麟にも奨め、且つ神社仏閣を焼き払つたとさえ云つている。此の真実を以て新しく歴史を見なおさねばならないのではないか。

尚此の機に広くお尋ねしたいのは、安岐城主田原親貫の位牌か墓標が系図かによつて死亡年月日をお知らせ願いたい。

実は　豊筑乱記　天正八年八月廿三日　鞍掛城にて自害

両豊記　天正八年二月下旬　鞍掛城落城、落ちのびて切腹

大友興廃記　天正八年二月二十四日　鞍掛城本丸　切腹

入江文書　天正八年三月以降　城中にて自害せず逃れて豊前善光寺下村竹江村に蟄居す、大友氏城井の住人時枝に命じて討たしむ、討死す

然るに片山文書（大分県史料）には

天正八年十二月二十七日現存になつている。

今度武蔵要害并福寿院切寄落去之刻、於攻口砕手、頸壱被討取候、誠感悦候、必追而可顕其志候、弥可励忠儀事、頼入候、恐々謹言

天正八年十二月廿七日　親貫

片山越後守殿　まいる

（昭和三十七年十月十八日稿　奈多八幡宮司）